

みんなちがって、
みんないい。

大和郡山市長

上田 清



市長からの
メッセージ

新成人の皆様、本日はおめでとうございます！
どうか、思い出に残る一日となりますように。

さて忘れられない話があります。今から20年近く前のことでしょうか、エレベーターの入口に困った顔をした車椅子の人が居て、そこへやってきた若者が、その人の代わりにボタンを押してあげる…。

まさに「指一本」のボランティアとして、テレビで放映されていた啓発CMの一コマですが、これを見た車椅子の知人はこう言ったのです。「障害者を弱者としてしか見ていないのではないか。ボタンの位置を下げてもらえば、僕たちだってボランティアができる」

今、さまざまなボタンが車椅子にあわせて配置されていますが、相手の立場に立ってものごとを考えることの大切さを知る貴重な経験でした。

自分とは異なる立場の人をどのように理解するか。

人権のまちづくりを考える基本ではないでしょうか。

金子 みすゞさんの詩を噛みしめたいと思います。

わたしと小鳥とすずと

わたしが両手をひろげても、
お空はちっともとべないが、
とべる小鳥はわたしのように、
地面(じべた)をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、
きれいな音はでないけど、
あの鳴るすずはわたしのようで、
たくさんうたは知らないよ。

すずと、小鳥と、それからわたし、
みんなちがって、みんないい。

成長の第一歩

後藤みづき 郡山東中学校出身



新成人からの
メッセージ

私たちは、大人としての自覚を身につける意識を持つのではなく、身につけることが義務だということを自覚しなければならない年齢になりました。今まで、周りの大人たちに頼って生きてきた未成年であった私たちは、自らがこれから頼られる立場になるということ、また、周りからそのように見られているという意識が常に必要なようになってきます。

だからといって、すぐにそれを自覚することは難しいと思います。私たちが子どもの頃描いていた二十歳というものは、自分の将来や様々なことがもう決まっているはずだと考えていたのではないのでしょうか。しかし、実際に二十歳になり成人式を迎えても、考えはまだまだ子どもで、将来の夢も何も決まっていな、漠然とした不安を強く持っているという人も多いと思います。私はそうです。自分がなれたかった大人にはなれていないし、自分が大人になったという感覚はまだありません。

私はこれを悪いことだとは思いません。これが多くの新成人の姿であり、等身大で正直な感想だと思います。だからこそ、今日の成人式を機に、少しずつ自分を変えていくことが成長の第一歩であるのだと噛み締め、これからの長い人生を歩んでいきたいと私は考えています。

両親への感謝、
これからの自分

植村 彩樹 片桐中学校出身



新成人からの
メッセージ

二十歳を迎えた今、私がこれからどんな自分になりたいのかということについて、改めて考える時が来たと思っています。

今ここに自分という存在があるのは、誰よりも両親のおかげだと強く実感しています。今後は、私自身が大人としての自覚を持ち、社会の中で誰からも素敵な大人だと思ってもらえるような人間になることで、両親に恩返しをしていきたいと考えます。

私は将来、社会福祉士という職に就きたいと考え、大学で社会福祉について学んでいます。人の役に立てる職種ではありますが、様々な立場の人と直接的に関わる仕事である以上、自分の言動には責任を持たなければならないと思います。地域との交流も大切にしながら、老若男女を問わず、頼りにされる社会福祉士になりたいと思います。

もちろん私生活においても、自分の言葉や態度を相手がどのように思うかを冷静に判断しながら、相手を傷つけたり不快にさせたりすることのないよう、大人として配慮していかなければならないと考えます。

これからも、両親への感謝を忘れず、社会に出たら他の人から自分の行動を真似してもらえるような、素敵な大人になりたいです。

〈平成29年 新成人の集い「成人式」新成人スタッフ〉

「人権尊重」は
世界基準…

第4回水木十五堂賞受賞者
芝原生活文化研究所代表

辻本 一英



メッセージ

ご成人されたみなさまにお祝いを申し上げます。

21世紀のグローバル時代に生きるみなさまは、人びとから尊敬される人間力を磨き上げ、世界に羽ばたいてください。そのためには、ふるさと大和郡山市(日本)の歴史や文化を深く学び誇りを持つことに加え、豊かな人権感覚を身につけることが不可欠となります。世界の一流アーティストやアスリートは、スキルアップに汗を流す傍ら、人格を磨くことを怠りません。地球規模での「平和・人権・環境」を見据えて自らを高めています。戦争や差別を許さないというライフスタイルは、もはや世界基準となっています。ビジネス社会でも同様です。

国際社会から日本における最大の人権課題は、「アイヌ民族の人権確立」と「部落問題の解決」であると指摘されてきました。以来、国を挙げて誰もが安心して安全に暮らせる社会づくりに取り組んできました。人権課題を学び解決する力は、市場経済社会にあっても商品の生産・運搬・販売の過程で、「人間や環境にやさしい品質」を生み出しています。企業でも、豊かでしなやかな人権感覚を持つ人材が求められる所以です。

「人を愛するということは、自分の知らない人生を知ること」と語ったのは灰谷健次郎(故人、児童文学作家)さん。成人されたみなさまには、国際社会の一員として身近な人権課題を克服するための学習と、一歩を踏み出す勇気を持って頂きたいと願っています。世界で輝かしく活躍されるためにも…。

辻本一英氏は、阿波木偶箱まわしで用いる木偶や周辺用具などの資料の蒐集を行い、失われかけた伝統芸能の復興・継承に大きく貢献されております。

